

日本ヘーゲル学会

第15回研究大会

2012年6月16日(土)・17日(日)

北里大学
(相模原キャンパス)

日本ヘーゲル学会 第15回研究大会プログラム

2012年6月16(土)・17日(日)

於：北里大学(相模原キャンパス) L1号館6階

発表会場：61教室
理事会会場：6階大会議室
会員控え室：62教室
懇親会場：大学病院新棟8階
展望レストラン「フォレスト」

開催校責任者連絡先

〒252-0373

神奈川県相模原市南区北里1-15-1

北里大学一般教育部

小林 亜津子

【第1日】6月16日(土) (会場：61教室)

◆ ◆ 理事会 10時~12時30分 ◆ ◆

会場：6階大会議室

.....シンポジウム 14時~17時.....

「ヘーゲル大論理学出版200年を迎えて」

報告者： 高山 守(東京大学)
久保陽一(駒沢大学)
大河内泰樹(一橋大学)
司会： 徳增多加志(鎌倉女子大学)

◆ ◆ 総会 17時~18時 ◆ ◆

◆ ◆ 懇親会 18時~20時 ◆ ◆

会場：北里大学相模原キャンパス
大学病院新棟8階展望レストラン「フォレスト」
会費：一般4,000円、院生3,000円

【第2日】 6月17日(日) (会場:61教室)

.....個人研究発表 10時30分□12時.....

「『方法』の〈生成〉としての「意識の経験」 10時30分□11時15分
—緒論の方法論に関する一考察—
発表者:飯泉佑介(東京大学)
司会:小島優子(駒沢大学)

「ヘーゲルは何故改訂を試みたのか 11時15分□12時
—度量編「第1章特有の量、A特有の定量」について—
発表者:佐野之人(山口大学)
司会:山口祐弘(東京理科大学)

□ □ 休憩 12時□13時 □ □

.....ワークショップ(二件平行)13時30分□16時30分.....

『大論理学』 (会場:61教室)
題目:ヘーゲルにおける「概念」とは何か
討論者:川瀬和也(東京大学)
裕智樹(福山平成大学)
司会:赤石憲昭(一橋大学)

『精神現象学』 (会場:6階大会議室)
題目:「悟性」章における「主客同一」の議論について
討論者:松岡健一郎(同志社大学)、濱 良祐(同志社大学)
司会:山脇雅夫(高野山大学)

必然性・偶然性・自由

□ □ 「客観的論理学」から「主観的論理学」へ□ □

□ 山 守

ヘーゲルの『大論理学』とは、何なのか、何を企図する学であるのか、という問いに対する回答は、驚くほど明瞭に与えられているように思われる。というのも、『論理学』は、ヘーゲルの初期論考、すなわち、『差異論文』や『懐疑主義論文』において提示された哲学構想が、単純明快に具体化されたものと、見るができるように思われるからである。その哲学構想とは、簡単に再現するならば、こうである。すなわち、それは、基本的に、「悟性」「理性」「直観」という三段階構成で、まずは、「悟性」だが、それは、一切を「絶対者から隔離し、自立的なものとして固定する」という「制限する力」(2.20)である。「そこには制限されたものの全総体が見いだされうるが、ただ絶対者それ自体のみは見いだされえない」(ibid.)、という。次に「理性」は、「否定的な絶対者の力」(2.26)である。それは、「悟性に」「秘密の働きかけ」を行ない、「悟性を誘惑し」、「悟性」自身に、「制限されたものの総体を無きものとする」ように仕向ける(ibid.)。その際、露わになることは、制限され固定化された自己同一的なものA ($A=A$)は、ことごとく同時に自己非同一性 ($A=B$) を孕むという「アンチノミー」つまり「矛盾」において存するということである(2.37ff.)。こうした「アンチノミー」は、「悟性による、可能な限り最高の理性の表現」(2.39)であり、ここに、「悟性とその客観的世界は、その無限の豊かさにおいて没落の憂き目を見る」(2.26)。こうして、「絶対者と制限されたものの総体との間の分裂は、消え去り」、「理性」が「絶対者と関係する」(2.20f.)。最後に「直観」が、「理性」によって「要請」される(2.43f.)。この「直観」とりわけ「超越論的直観」(2.42)によってこそ、「知」の「肯定的側面」(ibid.)が構築される。すなわち、「自由」と「必然」、「知性」と「自然」、「観念的なもの」と「実在的なもの」等が「統一されて」(ibid.)、「学の体系」(2.46)が成立し、「絶対者」がそのものとして「構成」される。

こうして、哲学が三段階構成で構想されるが、諸家の論じるところによれば(Düsing, Trede, Bonsiepen)、ヘーゲルにおいて当時、「論理学」は「反省の体系(systema reflexionis)」として、本来の哲学である「理性の体系(systema rationis)」つまり「形而上学」への導入の役割を果たす学として位置づけられ、内容的には先の第二段階における「否定的な絶対者の力」の展開であった。

そうであるならば、□ □ もとより、「直観」は、おそらく同意語を語源とする「思弁(Spekulation)」と表現されるに至るが□ □、『大論理学』は、当時の「論理学」と「形而上学」とを一体化し、「客観的論理学」と「主観的論理学」として、「学の体系」のうちに取り込んだものである、ということになる。このことは、また、「客観的論理学」が、基本的に、カントのカテゴリー表を引き継いだものであることから、了解されよう。

こうした点を踏まえ、本発表においては、「客観的論理学」から「主観的論理学」への転換の論理を追うことによって、「自由」と「必然」、「知性」と「自然」、「観念的なもの」と「実在的なもの」という両者の「統一」の具体相を明らかにし、『大論理学』のもつ現代的な意味を問いたい。

関係の存在—認識—論の展開

久保陽一

「ヘーゲル論理学とは何か」を問うことは、論理学の内の個々の箇所を問題にするに先立ってあるいはその結果において、全体としての論理学の特質を問うことであろう。したがってこの問題は、ヘーゲル論理学に与する者であろうとなかろうと、広くヘーゲル哲学に興味を抱く人々の関心事であると思われる。そうだとすると、「ヘーゲル論理学とは何か」という問いは、端的に「ヘーゲル論理学とは何でないか」という問いとの関連において立てられて然るべきだろう。つまりヘーゲル論理学を他の領域、例えば伝統的論理学、かつての存在論、カントの超越論的論理学、また「応用論理学」（自然哲学と精神哲学）、数学や経験科学、更には学以前の「生」との関連で説明する必要があるだろう。ただしヘーゲル自身は、『大論理学』序論で述べているように、論理学の対象や方法や学の内容について予め外から説明するのではなく、テキストの内部で示し、基礎づけることを求めた。

しかしヘーゲルは論理学と他の領域との関連をまったく述べなかつた訳でもない。しかも多様な仕方で述べていた。例えば、『大論理学』第一巻を出版した際に、これは「まだ通常のいわゆる論理学を含まず」、「形而上学的ないし存在論的論理学である」と云った。ただし「主観的論理学」は「通常の論理学」を含むが、これも総じて存在論的である。逆に、ギムナジウムの授業の説明の際に、彼は「形而上学的なもの」は「論理学」のうちに「消えていく」と述べた。しかしその際、論理学とは伝統的論理学ではなく、「従来形而上学を悟性と理性の考察に還元した」カントの「超越論的論理学」に見られるようなものだという。実際、ヘーゲルはしばしば論理学を「思考の諸規定の学」と規定した。その際、問題は「思考の諸規定」の扱い方である。ヘーゲルは、フリースのように何か人間学的考察によってカテゴリーの源泉を明らかにするのではないし、カントの超越論的論理学に対しても意識—思考規定—物自体という枠組みは解消すべきだと考えた。「思考の外にそれだけで存在するような何ものかに関する思考が問題なのではない」。つまり考える主体や考えられる対象との関連を脱け出した、思考規定それ自体、言わばイデア的なものの意味が問われる。それが相互の関連において導出されるべきである。

そうだとすると、ヘーゲル論理学は伝統的論理学でも形而上学でもカント的超越論的論理学でもないが、それらとの或る関連において成り立つものである。それは、超越論的論理学の理念（思考と存在の統一）を含んだ存在論でありつつ、思考規定というイデア的なものの学である。だがそれはいかなる意味で成り立つのだろうか。

この問題を論理学構想の発展史から考えてみることにしたい。イェーナ時代初めに「生」の「反省」が企てられ、その中でカテゴリー、伝統的論理学の原理論と方法論という内容が「絶対者の反照」として意味づけられた後、存在—認識—論という理念のもとで関係の存在論として展開された。ここで関係の存在論とは、独立に存在する諸項の外的関係のうちに、項にとって関係が本質の意味を持つ内的関係が見出され、そこに「弁証法」と「自己内反省」が生じるという考え方である。それが『精神現象学』の体系構想を経て、ニュルンベルク時代に本質（反省）と推理ないし合目的性の刻印を得るようになる。

形而上学批判としての形而上学
—哲学的コンテクストにおけるヘーゲル論理学—

大河内泰樹 (一橋大学)

ヘーゲルは、『大論理学』有論の序文の中で、自身の論理学、中でも特に客観的論理学がかつての形而上学に取って代わるものであると述べている (GW 11, S. 32)。ここで、一般形而上学と特殊形而上学との区分について言及されていることから、ヘーゲルがヴォルフ学派の形而上学を念頭に置いていることは明らかである。しかし、ここで「取って代わる」といわれているのはいかなる意味においてなのであろうか。これが、本発表が取り上げる問いである。この問いに答えることは、ヘーゲル論理学そのものの性格をあきらかにするはずである。本発表はつまり「ヘーゲル論理学とは何なのか」という問いについて、哲学的な視点から回答を与えようとするものである。

ところで、ヘーゲルのこの発言を理解するのに重要なのは、客観的論理学が同時に「カントにおいて超越論的論理学であるものに部分的に対応する」と (控えめに接続法を用いてではあるが) されている点である (GW 11, S. 31)。この両者の連関は明らかであろう。なぜなら超越論的論理学の一部をなす超越論的分析論はカントにおいてやはりかつての存在論に取って代わるものと見なされていたからである (KrV. A247/B303)。

つまり、ヘーゲル論理学は、哲学的に見るならば、二重に過去の論理学・形而上学説に取って代わるものである。しかし、「とって代わる」ということ自体もまた、二重の意味に理解されうる。つまり、とって代わられるものをそもそも不要にしてしまう、という意味と、とって代わられるものが果たしていた機能そのものを引き継いでいるという意味である。ヴォルフにおいて論理学は第一哲学としての存在論に先立ち、認識能力を指導する学とされていた。

(つまり、イェナ期のヘーゲルはこの伝統的な体系構成に依拠していたわけである。もちろんその論理学は従来の論理学とは大きく異なっていたが。) ただし、ヴォルフ学派においては、論理学と存在論が体系構成上区別されていたとはいえ、存在論は論理学 (つまりは矛盾律と理由律) から導き出されるものと考えられていた (エンチュクロペディの「予備概念」を参照)。したがって、論理学はそもそも存在論的な意味を持つものと見なされていた。カントはそれに対して、必要条件 (*conditio sine qua non*) としての論理学を前提としながらも、現象としての存在の述語はこれとは異なる、超越論的論理学、特に分析論によって与えられると考えたのである。ヘーゲルの論理学はこの超越論的論理学を引き継ぎながらも、包括的で一元的な存在論=論理学として構想されることになった。

以上を踏まえて、本発表で主張したいのは以下の 5 つのテーゼである。

1. ヘーゲル論理学が形而上学に取って代わるのは、一方でそれが一般形而上学、つまり存在論としての機能を引き継いでいるからである。
2. ヘーゲル論理学が形而上学に取って代わるのは、他方でそれが特殊形而上学を無効とする論理であるからである。
3. ヘーゲル論理学は、形式論理学と超越論的論理学を統合するものであり、そのことによって、存在論としての機能を引き受けることが可能となっている。
4. にもかかわらず、ヘーゲル論理学は従来の実体論的存在論を徹底して批判している。
5. ヘーゲル論理学は形而上学を内在的に批判する形而上学である。

以上

「方法」の〈生成〉としての「意識の経験」□『精神現象学』緒論の考察

東京大学大学院人文社会系研究科 哲学専攻 飯泉佑介

本発表の目的は、『精神現象学』（以下『現象学』）緒論（Einleitung）における「方法」に関する叙述を分析することによって、この叙述が、それ自体、「方法」の〈生成〉を表しているということを明らかにすることである。この分析と解釈を通じて、『現象学』における「方法」概念の一面が解明されるだけでなく、この「方法」の有する哲学的な意義を再考することの必要性が示されるだろう。

よく知られているように、『現象学』の「方法」とは、「意識の経験（Erfahrung des Bewußtseins）」である。それは、簡潔に説明すれば、「われわれにとって」と「意識にとって」という二つの観点によって、様々な意識形態が継起的に登場してくるという、意識の弁証法的な運動のことを指しているといえることができる。

しかし、何故、このような「方法」によって意識形態が継起的に登場してくるといえるのか、また、この「方法」の哲学的な意義とは何なのか、等といった点については、いまだ解明されているとはいえない。

こうした問題について、本邦の現在の研究では、緒論で叙述される「方法」は、実際には、『現象学』の本論、つまり、「感覚的確信」に始まり「絶対知」に至る意識の諸形態の叙述には適用されていないという解釈が主流であるように思われる。この立場からすれば、「意識の経験」というヘーゲルの「方法」は、『現象学』全体の解釈にとって、それほど重要ではないということになるだろう。他方で、近年では、「意識の経験」を、近代的認識論とは区別される新しいタイプの「知識論」として解釈することによって、この「方法」を積極的に評価しようという研究なども現れている。しかし、こうした立場の場合でも、「意識の経験」が他ならぬ『現象学』〈の〉「方法」であることについては、あまり顧みられていないと考えられる。

本発表の課題は、このような『現象学』〈の〉「方法」としての「意識の経験」が有する意義を再考することへと向けられている。この課題の追究のためには、『現象学』本論の意識形態を調べ上げたり、「意識の経験」と他の哲学の概念とを比較したりすることよりも、むしろ、『現象学』の緒論における「方法」に関するヘーゲルの叙述を、改めて読み解くという作業が要求されるのではないだろうか。なぜならば、かの緒論は、『現象学』の中で唯一「方法」が主題的に論じられている箇所であるにもかかわらず、最新の研究においてさえ、「ほとんど明瞭でない」（L. ジープ）と結論づけられるほど、論述が複雑に込み入っているからである。こうして、すでに論じ尽くされた観すらある、緒論の「方法」に関する叙述を、ヘーゲル自身の意図に即して解釈することを通じて、『現象学』における「方法」の意義に関する議論の前提そのものの見直しという可能性が開かれると考えられる。

こうした観点から、本発表では、まず、『現象学』緒論の第9段落から第15段落までのテキストの綿密な読解に基づいて、そこでの「方法」の叙述そのものが〈弁証法〉的に展開していることを示し、その展開構造を明らかにする。この展開構造の主な論点は、次の二点である。すなわち、①緒論の「方法」に関する叙述は、「意識の対象と知との比較」と「意識の経験」とに大別することができ、両者の間には叙述の展開上の断絶があるということ、②こうした断絶は、「意識の対象と知との比較」の「挫折（没落）」と、「意識の経験」の「生成」を意味するということ、以上である。

さらに、こうした叙述の展開を可能にする条件として、「意識」と、この「意識」を対象とする「われわれ」との関係が論じられる。最後に、以上のような緒論における「方法」の叙述の特徴から、この叙述が、単なる「方法」の提示や説明ではなく、「方法」の〈生成〉を主眼としているという解釈を行う。このような解釈は、『現象学』の「方法」の意義を、「意識の経験」の〈経験〉として、あるいは、様々な「意識の経験」の〈規範〉として理解することにつながるだろう。

「ヘーゲルは何故改訂を試みたのか—度量編「第 1 章特有の量、A 特有の定量」について—

佐野之人 (山口大学)

『大論理学』度量編は比較的大きな改訂が行われている部分である。彼は何故このような改訂を試みたのであろうか。この問いに答えるために、まず改訂はどのように行われているかを明らかにする。ついで改訂の要点を取り出し、その意図を明らかにする。そうして最後にそれらを総合的に考察することを通じて改訂の意図を明らかにする。それによって改訂がいかなる態度、姿勢によってなされているかも明らかになるはずである。こうした作業を「度量編」の冒頭、「第 1 章特有の量」の「A 特有の定量」までについてテキストに即しながら行いたい。

作業は具体的には以下のようにしてなされる。この箇所は度量編全体の概要を述べた部分を含むため、予め目次に関する両版の異同を明らかにする。ついで今回扱う部分に関する段落対応表を作成し、両版における削除、追加、異同の実態を概観する。大きな削除や追加があるものの、対応関係が明らかに認められる段落は実線で結び、部分的にのみ第 1 版の表現が用いられているか、表現は異なっても内容的にはほとんど同じことを言っている部分がある場合には段落を点線で結ぶ。さらに叙述の構成や流れが分かるように、段落対応表に対応した仕方で、段落あるいは複数の段落をひとまとめにしたもの毎に表題をつけると共に、叙述の構造を図示する。以上は基礎的準備的な作業である。発表ではこうした作業をもとに改訂の実態と意図をその要点に従って明らかにしたい。

「度量編」の冒頭、「第 1 章特有の量」の「A 特有の定量」において今回明らかにしたい改訂の要点は、①度量の思想史的な位置付け、②「規則」概念の変更、③比重の位置づけ、④即自 (an sich) の用法である。④は両版の叙述構造の本質的な相違に関わっている。結論を述べるならば、A 版では悟性はこのように捉えるが、実際には、あるいは即自的にはかくかくである、という仕方で叙述が進んでいる。つまり弁証法は即自の立場で、即自的なもの (= 概念のうちにあるもの) を実在化する、という仕方で進行している。これに対し、B 版では悟性は自らの一面的な固執に基づいて没落するという仕方で弁証法を経験しており、その成果に基づいて新たな定立を行っている。第 2 版では「即自 (an sich)」は「定立されている (gesetzt)」という語と対をなす概念として用いられている。「定立された」とは悟性によって定立されたという意味である。ここにはある意味で、『精神の現象学』の意識の立場が復活していると言えるだろう。『精神の現象学』においても「即自 (an sich)」は「意識に対して (für das Bewusstsein)」に対する対概念として用いられていたのである。もちろん学の成立するエレメントが異なっており、『大論理学』における「悟性」を『精神の現象学』における「意識」と同一視することはできない。しかし両版の叙述方法は明らかに異なっており、第 2 版における改訂の意図の一つが叙述方法に関するものである、とすることができるであろう。発表ではこうした叙述方法の変化の持つ哲学的な意味、さらには改訂の態度、姿勢についても考察してみたい。

ワークショップ 大論理学

ヘーゲルにおける「概念」とは何か：『大論理学』概念論の「個別」を読む

担当：川瀬和也（東京大学） 碓智樹（福山平成大学）

司会：赤石憲昭（一橋大学）

今回のワークショップでは、『大論理学』概念論第一篇第一章「概念」の「C.個別」を取り上げる。ヘーゲル論理学はもとより、ヘーゲル哲学全体の理解にとって、「概念」は非常に重要な意味を持つ。このことは、ヘーゲルが自らの哲学的課題を「真理の学問的認識」と明言し、それを「概念」的把握としていることから明らかである。しかし、この場合の「概念」というのは、形式論理学において言われるような、特殊性を捨象した単なる共通性としての概念（抽象的普遍）ではなく、特殊性をうちに含みもつ、普遍性・特殊性・個別性の三契機の統一体としての概念（具体的普遍）であり、しかも、自ら自己を規定し、特殊化するような概念なのである。このヘーゲル独特の「概念」の解明のためにまずもって参照されるべきは、論理学の「概念そのもの」であり、中でも「個別」は、その議論が集約される部分である。本ワークショップでは、この「個別」について、『大論理学』の丹念な読解を通して、その解明を試み、ひいては、ヘーゲル哲学の核心である「概念」の解明にも寄与できればと考えている。

この「個別」の項は前半と後半で大きく二つに分かれている。前半は、ヘーゲルによる本来的な「個別」の把握が示されており、ヘーゲルにおける「個別」、「概念」を解明するための重要な部分である。また後半は、「概念」から「判断」への移行が示されており、「概念そのもの」の位置づけを考える上で重要な部分となる。本企画は「ワークショップ」形式で行われるものであり、担当者は該当箇所について、ヘーゲルの自己理解に即した厳密な解釈を行い、また、いくつかの論点を提示する用意をしておいたが、テキストの文章を共通の土台として、テキストの細かい読解のレベルから、内容上の大きな論点まで、参加者との共同作業によって、難解なヘーゲルの議論に対する理解を深めていくことが大きな目標である。

また、テキスト本文の解明に加えて、解明を試みているこの「個別」の把握が現実的にどのような意味を持つのかという、テキストを越える問題についても積極的に考えてみたい。ヘーゲル論理学プロパーの研究者はもちろんのこと、他分野の研究者やヘーゲル哲学に関心を持つ方にぜひ参加して頂き、多角的な意見交換の場にもできればと考えている。参加予定の方は、共通前提であるテキストの該当箇所にあらかじめ目を通し、積極的に議論に加わって頂きたい。

テキスト：Hegel, *Wissenschaft der Logik. Zweiter Band. Die subjective Logik oder die Lehre vom Begriff*. 1. Abschnitt. Die Subjektivität. 1. Kapitel. Der Begriff, C. Das Einzelne. (GW.12 S.49-52 [大全集版]；PhB.377 S.53-57 [哲学文庫版]；W.6 S.296-301 [ズールカンプ版]；武市訳『大論理学』下巻64-70頁；寺沢訳『大論理学』第3巻72-77頁)

※時間の都合上、「個別」に先立つ「普遍」、「特殊」についてはほとんど扱うことができない。その概略については、例えば、『エンツュクロペディー』（『小論理学』）第163節などを参照のこと。

『精神の現象学』ワークショップ：「悟性」章最終部分を読む

山脇雅夫（高野山大学）、松岡健一郎（同志社大学）、濱良祐（同志社大学）

「悟性」は「知覚」と「自己意識」の間に位置します。したがって、「悟性」において①「知覚」における限界が克服され、②自己意識への移行が準備されることが予想されます。われわれの見通しを述べておくと、

- ① 知覚の対象である「物」は、一と多、対自存在と対他存在との**対立**を孕んでいましたが、その矛盾は知覚世界の内部では解消されませんでした。しかしまた、知覚章では、矛盾項が不即不離の関係にあることも示されました。この対自存在と対他存在の不即不離の関係は、両者がある**統一**のうちにあることを示します。しかし知覚の対象は対自存在と対他存在だけなので、両者の統一はもはや知覚の対象ではありえません。これは、知覚の対象ではなく、思惟の対象です。ここに悟性の立場が成立します。ここには、一（統一）と多（分裂）の統一が現れています。それがどういふものなのか、悟性章の最後に登場する「無限性」が示しています。
- ② また、悟性の認識構成は、「悟性 - 現象 - 内なるもの」という推論構造で示されます。これは、動的な媒介構造で、現象は、内なるものを「**現わす**」ものとして捉えられます。この「内なるもの」を把握することは、「説明」の運動において典型的に表現されているように、**思惟が思惟自身による構成の作用**を捉えている事態であると言えます。現象が現象として完成され、内なるものを現わし切るようになると、先の推論構造は変動し、「悟性 - 現象/内なるもの」という構造になり、最終的には「内なるものが内なるものを観入する」（118）という関係が成立します。ここに自己意識が成立します。

このワークショップでは、「悟性」の結びの部分 (PhB 版 S.114~119、GW 版 S.98~102) を精読し、この二つの問題を検討することを目指します。最初に山脇がそこにいたるまでの悟性章の歩みを 10 分程度で概観し、そののちに松岡が無限性の箇所を、濱が自己意識生成の箇所をそれぞれ 25 分程度で報告します。そのあとで、フロアのみなさんを交えた討議検討を行います。（文責:山脇）

＜会場＞北里大学（相模原キャンパス）

ACCESS



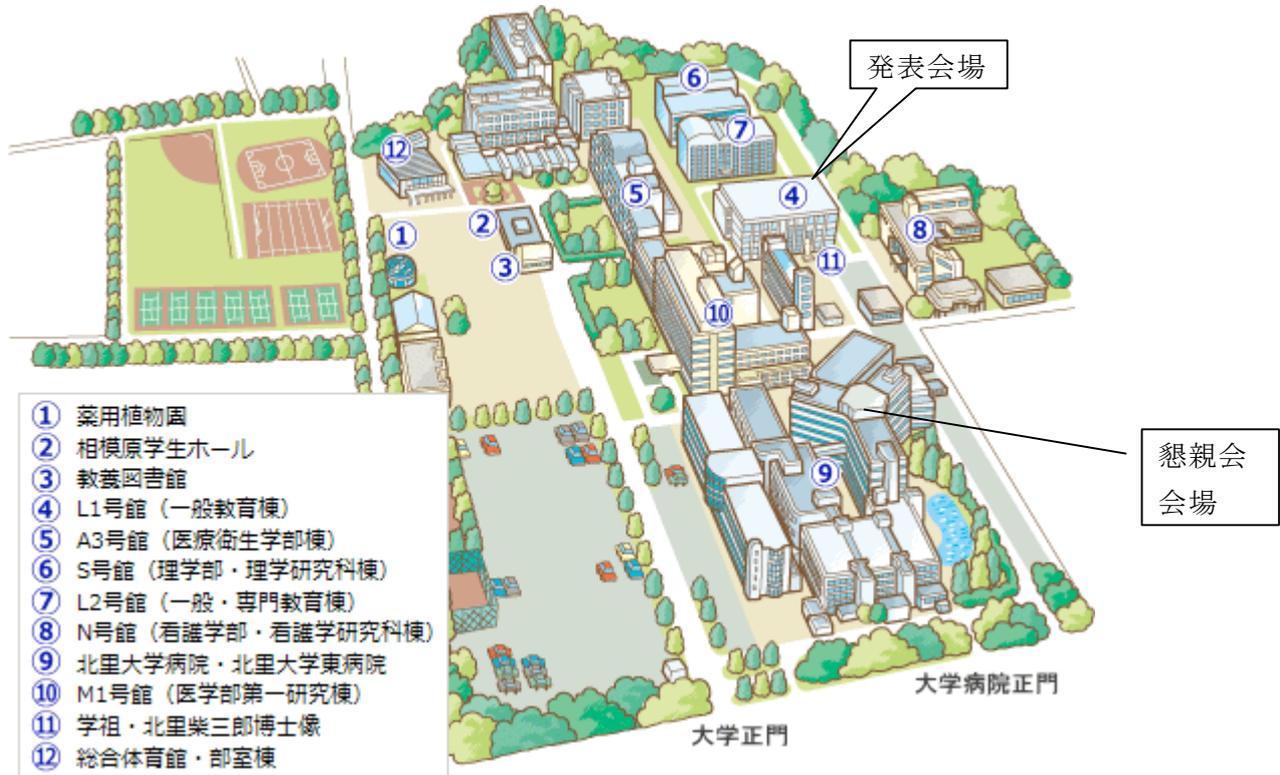
住所

〒252-0373 神奈川県相模原市南区北里 1-15-1 042-778-8111(代)

交通

新宿駅～相模大野駅 〔所要時間約 40 分〕	新宿駅より小田急線急行「相模大野」駅（北口）下車
羽田空港～相模大野駅 ・空港バス〔所要時間約 75 分～105 分〕 ・電車〔所要時間約 80 分〕	羽田空港→相模大野駅 羽田空港（京浜急行線）→横浜駅（相鉄線急行）→大和駅（小田急線）→相模大野駅
相模大野駅～北里大学 〔所要時間約 25 分〕	神奈川中央交通バス 1 番乗り場より乗車「北里大学」下車、1 番乗車・・・北里大学病院行、北里大学経由相模原駅南口行
横浜駅～相模原駅 〔所要時間約 40 分〕	JR 横浜駅より横浜線快速「相模原」駅（南口）下車
相模原駅～北里大学 〔所要時間約 25 分〕	神奈川中央交通バス 2 番乗り場より相模大野駅行き等に乗車「北里大学」下車

相模原キャンパスマップ



大学近辺の昼食について

土曜日なら病院内の職員食堂や8階のレストランが使用できますし、日曜日は、大学の近くに、不二家レストランと夢庵があります。

日本ヘーゲル学会事務局

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1
法政大学八〇年館文学部資料室気付 (菅沢研究室)

Tel & Fax : 03-3264-4568

E-Mail : hegel-11-12@phs.i.hosei.ac.jp

郵便振替口座 : 00150 10 10718 日本ヘーゲル学会